

デジタルアーカイブ学会 第9回研究大会 一般研究発表抄録集



三四郎池 (Sanshirou Pond)" by Kainoki Kaede is licensed under CC BY 2.0 (Openverse).

■一般研究発表プログラム

日時：2024年11月2日（土）

会場：東京大学本郷キャンパス法科大学院 総合教育棟

[セッション A1] (13:00～13:45、102 教室) (座長：未定)

- [A11] 災害アーカイブ構築のための画像分類モデルの適用の試み：熊本大学アーカイブ「ひのくに災史録」を対象として（宮崎 一貴，熊本大学）
- [A12] アーカイブズの記述標準 RiC 準拠の検索システム：試行結果とその検証（橋本 陽，京都大学）
- [A13] OSINT 活動の動機と継続要因の分析：一データへの意味付与と共有のコミュニケーションに着目して（藤野 朝咲，東京大学大学院）

[セッション B1] (13:00～14:00、201 教室) (座長：未定)

- [B11] 日本史・古典・書道を中心としたデジタルアーカイブの教育利用に係る事例分析：（小森 一輝，同志社大学大学院）
- [B12] 私立学校におけるデジタルアーカイブの活用：自由学園の歴史を DA「自由学園 100 年+」で学ぶ（菅原 然子，自由学園）
- [B13] 小学校でのアクティビティをアーカイブする試み：地図機能を用いた地域デジタルアーカイブの開発（飯塚 重善，静岡英和学院大学）
- [B14] 「デジタル・ヒューマニティーズ」の中等教育への拡張：真の文理融合型・探究学習を目指して（大井 将生，人間文化研究機構／国立歴史民俗博物館）

[セッション C1] (13:00～14:00、202 教室) (座長：未定)

- [C11] 知識遺跡のデジタル発掘：大学図書館における配架の沿革を可視化する提案：（李 雪貞，帝京平成大学）
- [C12] 変容する〈文化遺産〉：メディア考古学から捉えるデジタルアーカイブ（仲丸 有紗，東北大学）
- [C13] デジタル・AI 時代に参考にするべき米国の著作権登録制度：（城所 岩生，国際大学）
- [C14] ポストメタデータ時代のデジタルアーカイブ：ジャック・デリダの〈痕跡〉概念をめぐって（谷島 貫太，二松学舎大学）

[セッション D1] (13:00～13:45、203 教室) (座長：未定)

- [D11] 消えゆく方言の AI 的保存：山形県西川町で実施した実践的アーカイブをもとに（窪田 望，東京藝術大学 大学院、株式会社 Creator's NEXT）
- [D12] 香川・時空間デジタルアーカイブの公開と利活用策の提案：香川県独立の父・中野武嘗の足跡の記録を皮切りに（國枝 孝之，香川大学）
- [D13] 小規模地域デジタルアーカイブの展望と課題：奥会津デジタルアーカイブ〈Open OKURAIRI〉の実践をもとに（榎本 千賀子，新潟大学）

[セッション E1] (13:00～13:45、301 教室) (座長：未定)

- [E11] 地域学習プロセス＝アーカイブ化による地域学習支援モデルの実践：児童生徒が地域デジタルアーカイブの一端を担う学習モデル（前川 道博，長野大学）
- [E12] EAC-CPF を用いたアーカイブズ資料とその作成者の関係記述の適用：東京大学文書館における典拠レコード記述の事例から（元 ナミ，東京大学文書館）
- [E13] RAG を用いた文末コラムの自動生成：Beyond Book Project における知識獲得から知識体験への実装（原田 真喜子，東京大学大学院）

[セッション A2] (14:20～15:20、102 教室) (座長：未定)

- [A21] 「帝国議会会議録」・「人事興信録」・「法令データ」の連携活用について：戦前になぜ労働組合法は成立しなかったのか？（増田 知子，名古屋大学）
- [A22] 北上川舟運の時空間データベース構築とその活用に関する考察：博学連携の視点から（阿部 昭博，岩手県立大学）
- [A23] パンデミックと博物館のデジタル化の傾向：リトアニア共和国の統計データの分析（木村 文，帯広畜産大学）
- [A24] アーティストを対象としたデジタルアーカイブ活用に関する調査：東京藝術大学における取り組み（田口 智子，東京藝術大学）

[セッション B2] (14:20～15:05、201 教室) (座長：未定)

- [B21] 国立科学博物館タイプ標本データベースへの IIIF 公開機能導入と実践：自然史分野における IIIF 公開の展望と課題（伊藤（阿部）美菜子，国立科学博物館）
- [B22] パブリックドメインとフードを利用したブロックチェーン基盤のデジタルアーカイブ実践研究：コスト削減と価値の可視化・価値化から価値拡張へ向かうシステム（後藤 博之，Atomos-Seed 合同会社、NPO 法人 NEM 技術普及推進会 NEMTUS、フード NFT コンソーシアム）
- [B23] マルチモーダル生成 AI 共同による AI 倫理処理：デジタルアーカイブ開発などの AI 倫理課題に挑戦（澤井 進，岐阜女子大学）

[セッション C2] (14:20～15:20、202 教室) (座長：未定)

- [C21] 「CG アニメにおけるアーカイブの現状——『楽園追放 心のレゾナンス』における前作データの再活用から」：（松本 淳，専修大学）
- [C22] 学際複合的研究を誘発する記録映像アーカイビング手法について：1930 年代フィリピンと 1970 年代北部タイの映像を題材として（藤岡 洋，京都大学大学院）
- [C23] フィギュアスケートデジタルアーカイブ構築への提案：Twitter 分析によるプログラムの魅力の可視化とメタデータへの応用（鈴木 千佳，岐阜女子大学大学院）
- [C24] 1960～80 年代テレビ番組アーカイブの公開の取り組み 利活用の可能性と課題：（阪田 裕規，株式会社エー・ピー・シーリブラ）

[セッション D2] (14:20～15:20、203 教室) (座長：未定)

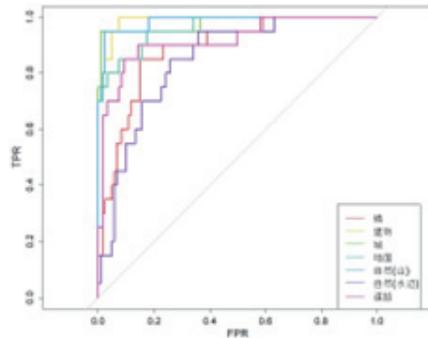
- [D21] 長崎の原爆を前後にして米軍が記録した航空写真の画像処理（その 3）：（全 柄徳，長崎大学）
- [D22] 古い映像の価値を掘り起こす「EXPO'70 映像アーカイブ」：制作過程でわかった課題と可能性：（吉水彩，エー・ピー・シーリブラ）
- [D23] カメラアプリによる町並み今昔写真の同一構図撮影体験を通じた景観学習イベントの実践：（高橋 彰，大阪大学）
- [D24] ゲーム展示の事例からみるゲームの現物保存に関する課題とデータベースの可能性：（小出 治都子，大阪樟蔭女子大学）

[A11] 災害アーカイブ構築のための画像分類モデルの適応の試み：熊本大学アーカイブ「ひのくに災史録」を対象として

宮崎 一貴 (熊本大学大学院自然科学教育部)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s35

災害の保存や継承を目的として、災害デジタルアーカイブの構築が行われている。近年、機械学習を用いた研究が多く行われており、被災状況の判定等の活用がなされている。一方で、アーカイブ構築に特化したモデルの構築事例は見当たらない。本論では、災害アーカイブ構築のコスト削減を目指し、画像分類手法を用いたモデルの適用を行う。その分類精度から災害アーカイブにおける適用可能性について議論を行う。ひのくに災史録の災害写真を用いて VGG16 モデルを構築した。その結果、モデルの精度は 72% 程度であった。(以下略)



5

[A13] OSINT 活動の動機と継続要因の分析：データへの意味付与と共有のコミュニケーションに着目して

藤野 朝咲 (東京大学大学院学際情報学府)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s43

本稿の目的は Open Source Intelligence (OSINT) 活動の初期参加および継続参加の動機を明らかにすることである。そのために、2022 年 2 月以降のウクライナ侵攻に関心を持ち、主に X を用いて活動する 6 名を対象とした半構造化インタビュー調査と質問紙調査を行ない、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (GTA) の手法を用いて分析する。その結果、活動の特徴、構造、動機、阻害理由を表す 28 概念が生成された。これより、初期参加の動機は「社会と自分の一続き感」「吊いの手段」「外伝的な探り当てのゲーム感」「自己効力感」の 4 概念が明らかになった。一方で継続参加の動機は「社会課題に対する効用感」「社会的証明による認められ感」(以下略)

表1. 回答者の概要

回答者	情報の扱い方の主目的	初期参加の主な動機	5年後の継続意向
A	発信	・正しい情報にアクセスできないことで体制の被害者となる国民や市民への連帯	なし
B	獲得	・明らかになっていない情報を得ることへの好奇心 ・自己満足	なし
C	発信	・ゲーム感覚の趣味	あり
D	発信	・正しい判断のための正しい情報支援をすること	あり
E	発信	・正しい情報から価値判断をするための寄与 ・学生時代からのロシア、ウクライナへの関心	あり
F	獲得	・自分の情報源を増やすための環境を作る ・面白いと思ったことを満足するまでやりたい ・趣味	わからない

[A12] アーカイブズの記述標準RiC準拠の検索システム：試行結果とその検証

橋本 陽 (京都大学大学図書館)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s39

本報告は、レコーズ・イン・コンテクスト (RiC: Records in Contexts) の実装を試行した結果について論じるとともに、そこから浮かび上がった課題を提示する。まず、RiC の概要を振り返った上で、その実装に向けて先進的な取り組みを見せるフランス国立公文書館 (ANF: Archives nationales de France) が RiC に着手した背景について取り上げる。その理由は、この背景から、ISAD(G) など既存の国際記述標準が実務においても不具合を起こしていることが (以下略)

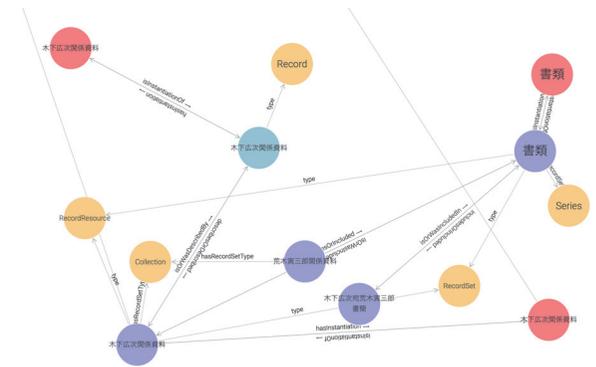


図1 RiC-RDFの試行結果

[B11] 日本史・古典・書道を中心としたデジタルアーカイブの教育利用に係る事例分析

小森 一輝 (同志社大学大学院)

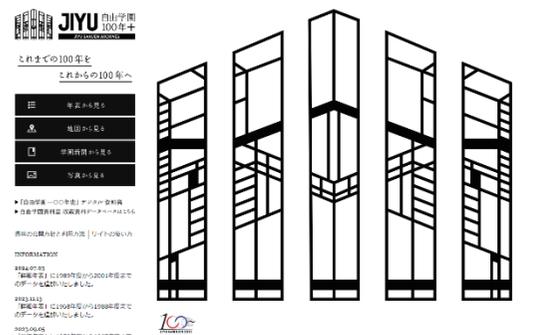
https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s47

本研究の目的は、古典籍などのデジタルアーカイブを学校の教科教育で活用する方途を考究し、その方途に基づいた授業実践を行い、その成果と課題を検証することである。その一環として、NHK の教育番組のうち、日本史・古典・書道におけるメディアの利活用状況を分析し、教科教育に適したコンテンツの種類や利活用の方法を考察した。その結果、日本史・古典・書道では人物の肖像や絵図の汎用性が高いと判断した。その結果を踏まえ、高等学校国語科「古典探求」において人物を含む絵画資料を用いた『平家物語』の授業実践を考案した。

[B12] 私立学校におけるデジタルアーカイブの活用：自由学園の歴史を DA「自由学園 100 年+」で学ぶ 菅原 然子 (自由学園資料室)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s51

本研究では、ある私立学校が構築・開設したデジタルアーカイブを、自校史教育で活用する方法と有効性について論じる。1921 年創立の自由学園は 2021 年、創立 100 周年を機に、書籍版の年史の出版と、資料公開を主な目的としたデジタルアーカイブ「自由学園 100 年+」(DA) の開設を行った。DA の安定的な運用のためには、利活用の促進が欠かせない。そこで 2023 年度より中学、高校の自校史教育の授業内での DA の活用を模索し始めた。自組織の構成員にその内容を積極的に還元することで、運用面における安定性も維持できる。そのためにはアーキビストが DA と利用者の中に入り、適切にガイドをし、また改善していく役割を担うことが必要となる。一私立学校の事例ではあるが、学校だけにとどまらず、小組織にも応用可能な利活用の方向性であるとする。



9

[B14] デジタル・ヒューマニティーズの中等教育への拡張：真の文理融合型の探究学習を目指してー 大井 将生 (国立歴史民俗博物館)

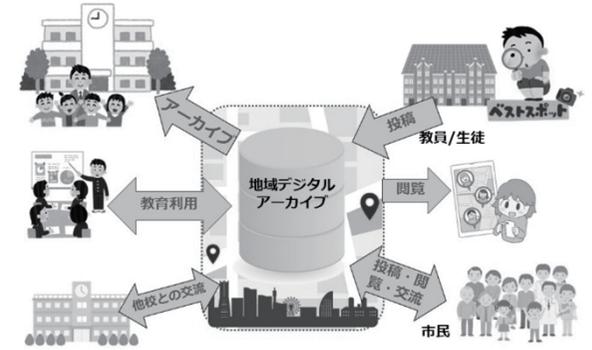
https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s59

昨年、高等教育・研究機関では、デジタル・ヒューマニティーズ (以下 DH) への注目が高まり、新しいカリキュラムも各地で開設されている。一方、中等教育では文理融合型の探究学習が重要であることが提言されているものの、その方法論に関する検討や実践の蓄積が十分に為されておらず、既存の文系/理系の枠から抜け出せないという課題がある。そこで本研究は、DH を中等教育に拡張するための学習モデルを開発することを目的とする。そのために、文系生徒の「問い」を情報学的手法で深めることを支援するプログラムを埋め込んだ、ゼミ形式の探究学習モデルを開発する。また、開発した文理融合型の学習モデルを用いて、中等教育学校において年度を通して中長期的な授業実践を行う。発表では、結果として得られた生徒の学びの進展や、その分析について述べる。本研究の成果により、人文情報学が持つ可能性を中等教育に拡張するとともに、生徒たちの「問い」に即した文理融合型の探究学習を支援することに貢献する。

[B13] 小学校でのアクティビティをアーカイブする試み：地図機能を用いた地域デジタルアーカイブの開発 飯塚重善 (静岡英和学院大学)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s55

本稿では、ICT の進展を背景に注目されるデジタルアーカイブについて、横浜市みなどみらい地区での取り組みを報告する。地域の小学校における SDGs/ESG 活動を記録する地図機能付きデータベースプラットフォームの構築を中心に、システムの試作と今後の展開を検討した。試作システムでは、投稿、承認、公開の 3 機能を実装し、まずは、2023 年度以前の活動内容をアーカイブする。今後の課題として、生徒による投稿、自作地図の組み込み、UI とアクセシビリティの向上、コンテンツ管理、地域連携、持続可能な運用モデルの構築を挙げた。“これからの活動を蓄積”するアプローチは、アーカイブを未来志向の動的プラットフォームへと進化させ、新たな価値創造の可能性を示唆している。



[C11] 知識遺跡のデジタル発掘：図書館配架の変化の再現を通じて 李 雪貞 (帝京平成大学人文社会学部)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s63

図書館の書架配架は目録分類法の更新と書籍の入れ替えにより変化している。目録分類法の改訂は学問や知識の発展により影響を受ける。書籍の入れ替え、すなわち利用ニーズが高そうな本と低そうな本の選定は、当時の流行やブームにより影響を受ける。それにより、書架の配架の変化を通じて、知識や学問の発展と流行の変化がわかる。故に、本発表は過去年度の配架様子を再現できる「動的」な書架を提案する。貸出回数により輝度を調整する拡張機能を備える。それにより、学問の変化や過去の出来事や世相を直間的に把握することができると思われる。特に学問の栄枯盛衰を表象化することで、知識の遡源のハードルが下がり、一般利用者でも断片的な情報の文脈を把握できる。

[C12] 変容する〈文化遺産〉：メディア考古学から捉えるデジタルアーカイブ

仲丸 有紗 (東北大学大学院情報科学研究科)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s67

デジタル文化遺産の登場がアーカイブのありかたを変えている。デジタルデータは更新され続ける「プロセス」であるため、従来のように「保存」することはできないが、「サンプリング」によってアーカイブすることは可能である。この方法においては、何を文化遺産としてアーカイブするかという価値づけと選択の問題に、明らかに機械が介在している。いま、私たちは機械によってアーカイブされたものを文化遺産とみなすという状況にあり、これはデジタルアーカイブのアフォーダンスとして解釈することができる。この視点は、伝統的なアーカイブの管理者や為政者が、アーカイブ自体によってどのように影響されてきたかという新たな問いを提示する。私たちは文化遺産を、〈権力〉をもつ人間だけでなく、技術や物質、環境といった非人間的な要素の組み合わせで生み出されるものとして再考すべきである。

[C14] ポストメタデータ時代のデジタルアーカイブ：ジャック・デリダの〈痕跡〉概念をめぐって

谷島 貫太 (二松学舎大学)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s75

資料へのアクセス可能性は、メタデータによって秩序化されている。その秩序をよりよく理解することが、より効率よく資料にアクセスするための条件だった。しかしこの条件は今後大きく変わる可能性がある。生成 AI ベースの対話型インターフェースは、資料へのアクセス可能性の根本的な原則を変容させるポテンシャルを有している。人間がデジタルアーカイブに合わせるのではなく、デジタルアーカイブが人間に合わせるようになる、というモデルがすでにリアリティを持っている。そのときには、資料へのアクセス可能性を担保するものとしてのメタデータという枠組み自体が再考を迫られる。本発表ではこのような事態を捉えるための足場として、レコード・コンティニューム理論における「痕跡」概念を発展させることを試みる。その参照元となっている哲学者ジャック・デリダの議論に遡るとともに、ポストメタデータ時代の基本概念として「痕跡」を位置付ける。

[C13] デジタル・AI 時代に参考にすべき米国の著作権登録制度

城所 岩生 (国際大学グローバルコミュニケーションセンター)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s71

ベルヌ条約（1886 年）は著作権の発生に登録などの様式行為を必要としない無方式主義を採用。1889 年に加盟した日本は取引の安全性を確保するために登録制度が設けられているが、プログラムの著作物を除いては著作物を創作するだけでは登録はできない。1989 年に加盟するまで長らく方式主義を採用したアメリカは、加盟するための著作権法改正で登録は著作権発生要件ではなくしたが、訴訟提起の要件とするなど登録を奨励した。生成 AI 時代を迎えて、AI を使用したことを記載しない登録申請も出されたりしたことから、著作権局は「AI 生成によって生成された素材を含む作品の著作権登録ガイド」を公表した。生成 AI を利用した著作物が大量に発生し、(以下略)



[D11] 西川町方言理解 AI の開発と評価：音声データベースと Word Mover's Distance を用いたアプローチ

窪田 望 (東京藝術大学美術研究科, 株式会社 Creator's NEXT)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s79

本研究では、山形県西川町の方言である村山弁を理解する AI システムの開発と評価について報告する。3,500 件の方言アーカイブを構築し、ChatGPT のシステムプロンプトに方言特徴を組み込む新しいアプローチを採用した。評価には Word Mover's Distance (WMD) を使い、既存モデルと比較して 76% (1.76 倍) の理解度向上を達成した。この結果は、特殊な言語処理タスクにおける AI 開発の新たな可能性を示唆している。

Table 1 異なるGPTモデルと方言知識投与有無による性能比較

ベース	方言知識投与有無	平均WMD (損失関数)	WMDの逆数 (スコア)	gpt-3.5との比
gpt-3.5-turbo-1106	なし	0.410	2.439	1.000
gpt-3.5-turbo-1106	あり	0.448	2.234	0.916
gpt-4-1106	なし	0.325	3.076	1.261
gpt-4-1106	あり	0.302	3.312	1.358
gpt-4o	なし	0.236	4.235	1.737
gpt-4o	あり	0.233	4.295	1.761

[D12] 香川・時空間デジタルアーカイブの公開と活用策の提案：香川県独立の父・中野武営の足跡の記録を皮切りに

國枝 孝之 (香川大学 創造工学部) https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s83

2021年から開始した香川・時空間デジタルアーカイブ [1] は「香川県独立の父 中野武営」の銅像除幕式の日に合わせて一般に公開した。時空間デジタルアーカイブとは時間 (いつ)・空間 (どこ) といった情報を基軸にコンテンツを管理することができ、多目的な情報サービスとして利活用できるように設計し開発を進めてきた。具体的には、事象の流れをスレッド (糸) でコンテンツの配置に時空間場といった概念で紀伝体と編年体の融合を目指している。(以下略)

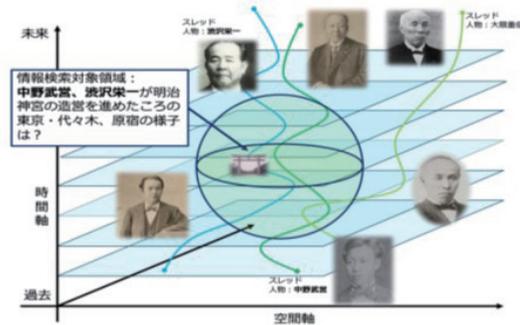


図2. 時空間とスレッドの関係

8

[E11] 地域学習プロセス＝アーカイブ化による地域学習支援モデルの実践：児童生徒が地域デジタルアーカイブの一端を担う学習モデル

前川 道博 (長野大学) https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s91

児童生徒にとって、自分の地元地域は生きた社会に触れ理解を深める恰好の学習フィールドであることは言うまでもない。しかし地元を学ぼうとしても大方の地域において地元地区の情報源は未だネット上に殆ど存在していないのが実情である。本研究では児童生徒が地元をフィールドとする地域学習を実践し、その学習成果をアーカイブ化、アウトプット化することが地域学習プロセスとなり、同時に地域デジタルアーカイブ化の一端を担うプロセスとなることを複数の実践事例により示し、地域学習プロセス＝アーカイブ化 (アーカイビング) のモデル化を行う。



[D13] 小規模地域デジタルアーカイブの展望と課題：奥会津デジタルアーカイブ〈Open OKURAIRI〉の実践をもとに

榎本 千賀子 (新潟大学 人文学部) https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s87

福島県奥会津地方 7 町村 (柳津町・三島町・金山町・昭和村・只見町・南会津町・檜枝岐村) による自治体連携型デジタルアーカイブ (以下、DA) 「奥会津デジタルアーカイブ」 (以下、奥会津 DA) の実践報告を行う。奥会津 7 町村は、人口減少と高齢化の進展にともなって低下しつつある文化資源管理能力の維持・向上と、地域イメージの発信を目指して、自治体連携型エコミュージアム活動「奥会津ミュージアム」に取り組んでいる。その中心的事業のひとつに位置づけられる奥会津 DA は、7 町村の文化資源についてデータを蓄積・共有し、自治体連携の枠組みのもとに発信する、奥会津地域の新たな文化資源管理基盤として期待されている。

本発表では、構想から DA サイト一般公開までの奥会津 DA 事業の導入期全体を対象に、その展望と課題を検討する。

[E12] EAC-CPF を用いたアーカイブズ資料とその作成者の関係記述の適用：東京大学文書館における典拠レコード記述の事例から

元 ナミ (東京大学 文書館) https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s95

本報告では、東京大学文書館が公開しているアーカイブズ資料記述において、作成者情報を ISAAR(CPF) (International Standard Archival Authority Record for Corporate Bodies, Persons and Families) に基づいて記述し、EAC-CPF (Encoded Archival Context for Corporate Bodies, Persons, and Families) の実装を試行した結果について論じる。多くの日本のアーカイブズ機関では、作成者情報は資料記述の一部として取り扱われているが、本研究では、アーカイブズ資料と作成者情報をウェブ上で関係づける手法として EAC-CPF の適用を検討する。さらに、デジタルアーカイブアプリケーション AtoM (Access to Memory) 上で、アーカイブズ資料と作成者情報の関係がどのように表現されるかを示し、今後の課題についても考察する。

[E13] RAG を用いた文末コラムの自動生成：Beyond Book Project における知識獲得から知識体験への実装

原田 真喜子 (東京大学大学院 情報学環)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s99

2022 年 4 月に開始された Beyond Book Project(BBP)「講談社・メディアドゥ新しい本寄付講座」では、書籍・電子書籍のようなパッケージ型ではなく、デジタルコンテンツ本来の特性・メリットを生かしたネットワーク型・オープン型の知的構成体のあり方を検討している。これは、未来社会における“知識獲得から知識体験への拡張”を提供する「新しい本」を開発し、社会実装することを目指すものである。本発表では、その成果の一部として作成した、利用者にアダプティブされた「文末コラム」生成のプロトタイプ構成と開発について解説する。このプロトタイプは、利用者のプロファイリング情報と読書付随行動から得られるデータとマイクロコンテンツ化した書籍情報を Retrieval-Augmented Generation (RAG) を (以下略)

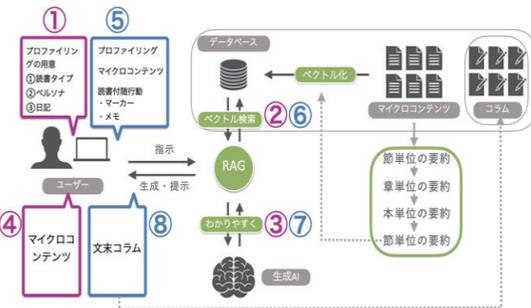


図2 システムの構成要素

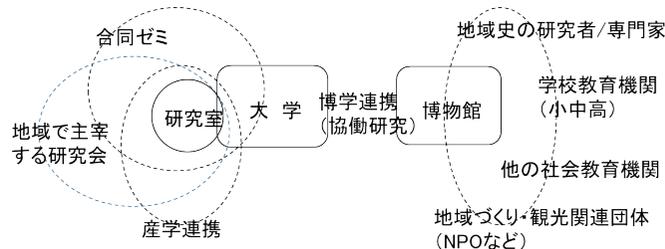
6

[A22] 北上川舟運の時空間データベース構築とその活用に関する考察：博学連携の視点から

阿部 昭博 (岩手県立大学ソフトウェア情報学部)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s107

令和4年度博物館法の改正に伴い、博物館の新たな役割として、博物館資料のデジタルアーカイブ化や地域の多様な主体との連携・協力による文化観光など地域の価値創出への寄与が明記された。これら博物館を取り巻く動向を念頭に置きつつ、本研究では江戸期の北上川舟運を対象として、公立博物館と大学の連携のもと時空間データベースの構築法と地域での様々な活用方法を明らかにし、地域史としての舟運の解明と継承に資することを目的とした取組みを行ってきた。本稿では、北上川舟運データベース構築の取組みとその地域での活用検討から得られた知見について、博学連携の視点から考察を試みる。



[A21] 「帝国議会会議録」・「人事興信録」・「法令データ」の連携活用について：戦前になぜ労働組合法は成立しなかったのか？

増田 知子 (名古屋大学大学院法学研究科)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s103

帝国議会の「議事速記録」は、「官報号外」（内閣印刷局発行）で公表されており、議会史の最重要基本資料である。これをDB化したのが、国立国会図書館の「帝国議会会議録検索システム」である。これに報告者の研究グループが作成した「法令DB」、「人事興信録DB」[1]を併用することで、法案を付託された専門性のある委員会で争点化した条文に焦点を当て、代表制における政治的妥協・取引が法律の制定改廃にどのように収斂したのかを説明できると考える。事例として、第51回帝国議会（大正14・1925年12月～15年3月）で審議された労働組合法・労働争議調停法・治安警察法・暴力行為等処罰法を取り上げ検討する。

[A23] パンデミックと博物館のデジタル化の傾向：リトアニア共和国の統計データの分析

木村 文 (帯広畜産大学人間科学研究部門)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s111

2020年初頭から全世界的に広まった新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、世界各地の博物館は活動を制限された。対面で活動できなくなった分、デジタル技術を活用したオンラインのコミュニケーションを増加させたと言われている。しかし、実際にどの程度の増減があったのかについては、先行研究では明らかになっていない。そこで本稿では、リトアニア共和国におけるデジタル化の事例をもとに、統計データから博物館においてパンデミックを機にデジタル技術の活用が増えたのかを検証した。リトアニア文化省の公表する博物館の統計データのうち、2018年から2023年分の「年間のデジタル化された文化財の点数」のデータを用いて、デジタル化が行われた点数の推移を検証した。合計値と中央値を算出し、グラフと表を作成して、推移の検証を行なった。分析の結果、(以下略)

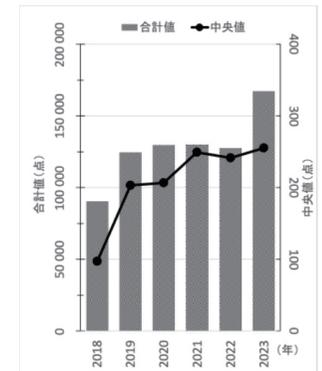


図1 年間のデジタル化された文化財の点数の合計値と中央値 (2018年～2023年)

[A24] アーティストを対象としたデジタルアーカイブ活用に関する調査：東京藝術大学における取り組み 田口 智子 (東京藝術大学未来創造継承センター)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s115

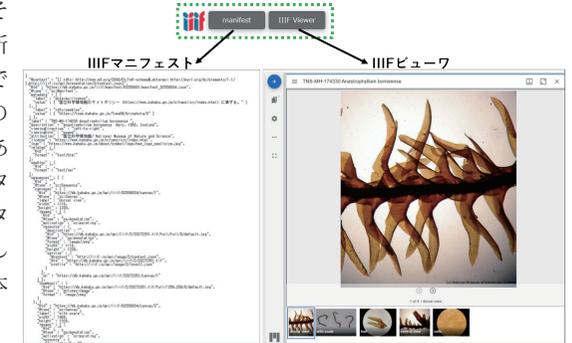
近年、国内外で美術、音楽、演劇、舞踊といった芸術資源を対象としたデジタルアーカイブが構築され、様々な分野で利活用が進んでいる。しかし、アーティストを対象とした研究はまだ報告がわずかであり、アーティストによるデジタルアーカイブの活用方法や問題点などについては不明な点が多い。そこで本発表では、アーティストの創作に適したデジタルアーカイブについて検討することを目的に、先行研究において指摘されている課題を整理するとともに、東京藝術大学未来創造継承センターにて実施している芸術資源活用プロジェクト公募について紹介する。さらに、演奏家である発表者(酒井)が、当事者の視点からアーティストが創作に用いる際にデジタルアーカイブに求められる要素について考察を行った。これらの課題を踏まえ、様々なアーティストの個別事例の収集・蓄積を行うことにより、創作に適したデジタルアーカイブの構築が可能となると考えられる。

[B21] 国立科学博物館タイプ標本データベースへのIIIF公開機能導入と実践：自然史分野におけるIIIF公開の展望と課題

伊藤 美菜子 (国立科学博物館 標本資料センター)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s119

博物館法の改正により、博物館では所蔵資料のデジタルアーカイブ化が求められている。近年、博物館資料等の画像公開においては、国際共通規格である IIIF に準拠して画像を公開することで、様々な側面から画像の利活用を促進することが可能となっている。その一方、自然史分野の博物館においては所蔵資料のデジタルアーカイブ化は遅れがちであり、特に日本国内においては IIIF 形式での画像公開はまだまだ限定的であるのが実情である。国立科学博物館では 2022 年度のデータベースシステムの更新を機に、一部のデータベースにおいて画像の IIIF 公開機能を導入した。本発表では、国立科学博物館タイプ標本データベースにおける試験的な(以下略)



[B22] パブリックドメインとフードを利用したブロックチェーン基盤のデジタルアーカイブ実践研究：コスト削減と価値の可視化・価値化から価値拡張へ向かうシステム

後藤 博之 (Atomos-Seed 合同会社) https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s123

ブロックチェーンを効果的に活用することで、「コスト」「時間」「労力」といったデジタルアーカイブの世界に横たわる大きな課題を解消し、また、デジタルアーカイブの普及と進化を促進するための実践研究を発表する。デジタルデータの堅牢性を高め、長期保存を容易にすることを根幹とし、ジャパンサーチとの連携を前提とする。OSS で分散型であるブロックチェーン導入により、長期的にコストを削減し、デジタルデータの価値の可視化や価値化、さらに価値の拡張や運用までを見据えて、マネタイズに作用する高効率なシステムの構築と、データと価値の循環を目指す。耐改ざん性を備え追跡・証明が可能なシステム上に、更新履歴をもデジタルアーカイブしていく方針を進めている。物体・物質とデジタルデータとの適切な連携も並行して追求しながら、低コストかつ短時間で、誰もが強固なデータを長期保存できる仕組みの実現化を図っていく。

[B23] マルチモーダル生成 AI 共同による AI 倫理処理：デジタルアーカイブ開発などの AI 倫理課題に挑戦 澤井 進 (岐阜女子大学)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s127

本研究では、人工知能(AI)とデジタルアーカイブ開発の AI 倫理課題を解決するため、3種類のマルチモーダル生成 AI が共同で AI 倫理処理できるかを検討・試作した。今回、一人一台端末のトラブルに関するデジタルアーカイブ論文に対して、「教師あり学習」用の倫理規則や学習済みの TensorFlow.js モデルを使い評価し、IoE (Internet of Ethics, Internet of Education, Internet of Energy of Life)AI 倫理チャットボットの有効性を検証した。

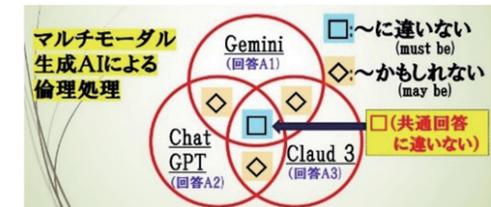


図 1. 3種類の生成 AI の共通回答

[C21] CG アニメにおけるアーカイブの現状：『楽園追放 心のレゾナンス』における前作データの再活用から

松本 淳 (専修大学文学部ジャーナリズム学科)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s131

デジタル化が進むアニメの制作工程において、CG (コンピュータグラフィックス) は欠かせない技術となっている。筆者は科学研究費助成事業基盤研究 (B) 『「アニメ中間素材」の分析・保存・活用モデルケースの学際的研究』に参加しており、新潟大学アニメ・アーカイブ研究センター (ACASiN) が2016年に構築した「アニメ中間素材オンライン・データベース (AIMDB)」をアニメ制作に携わる実務家に試用してもらい、その有用性や課題について取材を行った [1] が、紙に鉛筆で描画する作業が起点となる作画アニメーションに対して、全てがデジタルデータとして構築されるCGのアーカイブについての先行研究は少ないことから、10年ぶりに続編が制作される『楽園追放心のレゾナンス』がどのように前作のデータを活用しており、アーカイブに関してどのような可能性や課題があるのかを制作に携わる実務家に聞いた。

二

[C23] フィギュアスケートデジタルアーカイブ構築への提案：Twitter分析によるプログラムの魅力の可視化とメタデータへの応用

鈴木 千佳 (岐阜女子大学大学院文化創造学研究科)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s138

スポーツであるとともにアートであり選手にアイドル的な注目も集まるフィギュアスケートにおいて、その魅力をファンがどのように捉えているかを知り、デジタルアーカイブの利活用を促進するための工夫に役立てることは豊かなフィギュアスケート文化の醸成に有用と考えられる。

本研究はテレビ東京のTwitter投稿企画に応募して公開されたファンの言葉を計量テキスト分析ツール KH Coder を用いて分析・可視化した。その結果、ファンはスケーターの技術の評価やプログラムの理解に必要な知識を有し、他のスポーツファンやアイドルファンとも通じる視点で観戦・鑑賞しており、(以下略)

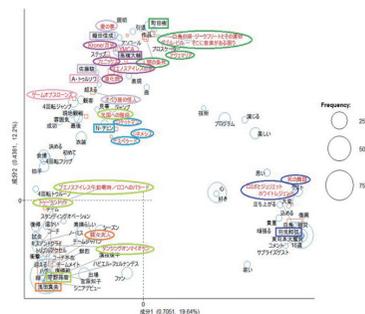


図1. 投稿数上位9名のスケーターの23のプログラム

[C22] 学際複合的研究を誘発する記録映像アーカイビング手法について：1930年代フィリピンと1970年代北部タイの映像を題材として

藤岡 洋 (京都大学)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s134

アナログフィルムで記録された動的映像 (以下、映像) は時に内容の冗長性から、資料化がメディア単位にとどまり内容まで踏み込むことが難しい。そこで物理的にフィルムに残された映像の最小単位：ショットを部分映像へのアクセス経路として確保し、複数のショットを意味的単位：シーンとして指定することで、冗長な記録映像を資料化する試み (ショット単位分析、仮称) を行ってきた。シーンを指定する過程では、映像が写真など他種資料を引き寄せ、分析・検証する他分野研究者の間での闊達な議論を促される。また最近になって、この分析が参加した研究者自身の研究に還元されていく小さな例も見られるようになってきた。本発表は映像資料化の方法論を簡単に説明した上で、シーン指定の途上で資料と研究者との間に起きた事例をいくつか紹介し、アーカイブ構築過程 (アーカイビング) そのものの意義について考える。

[C24] 1960～80年代テレビ番組アーカイブの公開の取り組み 利活用の可能性と課題

阪田 裕規 (株式会社エー・ビー・シーリブラ)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s142

本発表では、エー・ビー・シー リブラが保有する1960年代から80年代にかけて制作されたテレビ番組アーカイブの公開と利活用の取り組みについて報告する。これらの番組は、全国各地の観光名所や料理、歴史、芸術など多岐にわたるテーマを扱い、昭和の貴重な映像資料となっている。公開に向けては、まず「ABCリブラフィルムアーカイブ = ALFA」としてリストをホームページに掲載し、YouTubeやSNSで短尺のダイジェスト動画を順次公開した。また、著作権や肖像権の確認・処理を行い、関係機関や施設からの許諾を得た上で映像を公開している。さらに、放送番組センターとの関係やパブリシティ権・肖像権の問題に対しても慎重に対応している。本発表では、これらの取り組みを通じて得られた利活用の可能性と課題について詳述し、民間企業がアーカイブを公開する際の指針を示す。

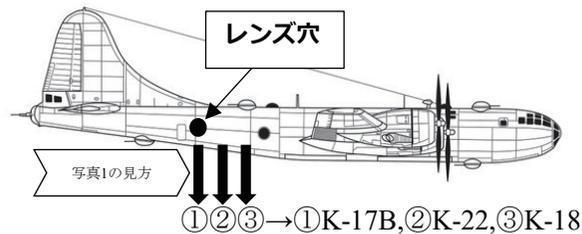


公開ページ

[D21] 長崎の原爆を前後にして米軍が記録した航空写真の画像処理 (その3)

全 炳徳 (長崎大学情報データ科学部) https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s146

第二次世界大戦中、B-29 スーパーフォートレスを改造して作った写真偵察機 F-13 が初めて長崎上空に現れたのは 1945 年 3 月 9 日のことである。長崎に原爆が落とされた日からちょうど 5 ヶ月前のこと、極秘・写真偵察機による長崎ミッションの始まりを告げるものだった。その約 1 ヶ月半後の 4 月 28 日、科学者と軍の代表が率いる原子爆弾・マンハッタン計画の第 1 回目の目標選定委員会が開かれた [1]。その委員会の机の上に、長崎と佐世保を含む 17 都市の目標都市がリストアップされた。その約 6 ヶ月後の 9 月 7 日、写真偵察機 F-13 が再び長崎上空に姿を見せた。長崎上空での偵察ミッションを終える日であった。米軍の写真偵察機 F-13 による長崎上空での偵察ミッションは凡そ 6 ヶ月間に及び、(以下略)



[D23] カメラアプリによる町並み今昔写真の同一構図撮影体験を通じた景観学習イベントの実践

高橋 彰 (大阪大学)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s153

カメラアプリ「メモリーグラフ (メモグラ)」は、同一構図撮影を支援し、過去の写真と現在の風景を比較撮影できる機能を持ち、景観変化の把握と関心喚起に効果がある。より幅広いユーザーが景観学習に活用できるよう、メモグラの機能を拡張し、新たにメモグラ・プラットフォームを構築した。このプラットフォームは、共有プロジェクト (画像群) 管理用のメモグラ・マネージャ、画像撮影用のメモグラ・アプリ、画像共有用のメモグラ・ビューアから構成される。マネージャは一般ユーザーによる共有プロジェクト登録を簡易化し、アプリは現地撮影を支援し、ビューアは結果の共有と閲覧を担う。これにより、イベントの企画から実施、振り返りまでを一貫してサポートできる。本稿では、このプラットフォームを紹介するとともに、その有効性を検証するため、大学生主導の景観学習イベントの実践について報告する。



図.2 イベントの様子
(左: まちあるき、右: 茶話会)

[D22] 古い映像の価値を掘り起こす「EXPO'70 映像アーカイブ」: 制作過程で分かった課題と可能性

吉水 彩 (株式会社エー・ビー・シーブラ)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s150

本発表は、朝日放送グループホールディングスが 1970 年の大阪万博に関連する取材映像をデジタルアーカイブ化し、社内提案を経て公開に至るまでの過程について述べたものである。2022 年 4 月に「EXPO'70 映像アーカイブ」をウェブサイト上に立ち上げ、Google Map 上で万博公園の場所をピンで示し、そこからパビリオンの映像が閲覧できるようにした。公開にあたっては、映像の著作権処理や肖像権の問題をクリアしたが、特にパビリオン内部の権利確認作業では多くの課題が生じた。これらの課題や、映像公開を通じて得られた成果について報告する。



図1. マップ画面

[D24] ゲーム展示の事例からみるゲームの現物保存に関する課題とデータベースの可能性

小出 治都子 (大阪樟蔭女子大学)

https://doi.org/10.24506/jsda.8.s2_s157

近年、ビデオゲーム機、ビデオゲームソフトなどの実物資料や関連資料を展示する「ゲーム展」が国内外のミュージアムで開催される機会が増えている。このような展示の増加は、ゲームアーカイブに関する研究と実践に大きく関わっている。本発表は、ゲーム展示の事例を紹介し、その際に浮彫となったゲームの現物保存やデータベースに関する課題や可能性について考察した。ゲーム展示は来館者にとって親しみやすいテーマであると同時に、来館者の経験にも大きく左右されるテーマでもある。だが、ゲームを保存する国内のミュージアムの数は少ない。ゲーム作品にはさまざまなバリエーションがあり、その識別には専門的な知識が必要とする。しかし、ゲームの現物保存の増加やデータベース化が進めば、ミュージアムのゲームの保存率の向上や利活用の促進が予想され、ゲーム展示の課題が一つ解決できると考えられる。